

フランス語圏舞台芸術・文献目録 (2010 - 2011)

堀切克洋 (編)

1. 著作・翻訳

一般書

- 伊藤洋、オディール・デュストド監修『フランス 17 世紀演劇事典』、中央公論新社、2011 年
- ロジェ・ズベール『十七世紀フランス文学入門』、原田佳彦訳、白水社、2010 年
- 清水徹『ヴァレリー——知性と感性の相剋』、岩波書店、2010 年
- テレーズ・ムールヴァ『その女の名はロジィ——ポール・クローデルの情熱と受苦』、湯原かの子訳、原書房、2011 年
- ヴィリジル・タナズ『カミュ (ガリマール新評伝シリーズ—世界の傑物 6)』、神田順子、大西比佐代訳、祥伝社、2010 年
- 高階秀爾『ヤン・ファール×船越桂』、淡交社、2010 年
- デブラ・クレイン、ジュディス・マックレル『オックスフォードバレエダンス事典』、鈴木晶監訳、平凡社、2010 年
- 守山実花『魅惑のドガ エトワール物語』、世界文化社、2010 年
- ダンスマガジン編「追悼特集 ローラン・プティ 1924-2011」『ダンスマガジン』2011 年 10 月号、pp.44-65
- 「インタビュー特集 パリ・オペラ座によくこそ！」『ダンスマガジン』2011 年 12 月号、pp.14-31
- 渡部篤郎『FRANCE 172 ATSURO WATABE』、キネマ旬報社、2007 年

研究書・評論

- 川那部和恵『ファルスの世界——五～一六世紀フランスにおける「陽気な組合」の世俗劇』、溪水社、2011 年
- 小倉博孝『コルネイユの劇世界』、上智大学出版、2010 年
- 小林和樹『モリエール『町人貴族』解析』、カモミール社、2009 年
- 渡辺淳『喜劇とは何か——モリエールとチェーホフに因んで』、未知谷、2011 年
- 『フランス十七世紀演劇集 喜劇』、鈴木康司、伊藤洋、富田高嗣訳、中央大学出版部、2010 年
- 『フランス十七世紀演劇集 悲劇』、伊藤洋、友谷知己、橋本能、浅谷真弓、皆吉郷平、千川哲生訳、中央大学出版部、2011 年

- 中央大学人文科学研究所編『フランス十七世紀の劇作家たち』、中央大学出版部、2011 年
- 清水徹『マラルメの〈書物〉』、水声社、2011 年
- 原大地『牧神の午後 マラルメを読もう』、慶應義塾大学教養研究センター、2011 年
- 村山則子『メーテルランクとドビュッシ——『ペレアスとメリザンド』テキスト分析から見たメリザンドの多義性』、作品社、2011 年
- 『三田文学 特集ポール・ヴァレリー』、2010 年夏号、三田文学会
- 小田中章浩『現代演劇の地層——フランス不条理劇生成の基盤を探る』、ペリかん社、2010 年
- 中條忍監修『日本におけるポール・クローデル—クローデルの滞日年譜』、大出敦、根岸徹郎、篠永宣孝編、クレス出版、2010 年
- 宇野邦一『アルト— 思考と身体』白水社、新装復刊版、2011 年 [1997 年]
- 間瀬幸江『小説から演劇へ——ジャン・ジロドゥ 話法の変遷』、早稲田大学出版部、2010 年
- 『ユリイカ 特集ジャン・ジュネ——“悪”の光源・生誕 100 年記念特集』、2011 年 1 月号、青土社
- アンドレ・ベルノルド『ベケットの友情 1979-1989』、安川慶治、高橋美帆訳、現代思潮新社、2011 年
- 和知叶恵『デュラス劇へのエチュード』、近代文藝社、2011 年
- ルック・ファン・デン・ドリス『ヤン・ファールの世界』、佐伯隆幸、高橋信良、石井恵、堀切克洋訳、論創社、2010 年
- 茂木秀夫『小森敏とパリの日本人：近代日本舞踊の国際交流』、創栄出版、2011 年
- ベルトラン・メヤニスタブレ『ヌレエフ——20 世紀バレエの神髄光と影』、新倉真由美訳、文園社、2010 年
- アニエス・イズリーヌ『ダンスは国家と踊る—フランス コンテンポラリー・ダンスの系譜』、岩下綾、松澤慶信訳、慶應大学出版会、2010 年
- 矢橋透『〈南仏〉の創出一癒しの文化史』、彩流社、2010 年
- 内山美樹子監修、武田潔編『還ってきた文楽フィルム『日本の人形劇—人形浄瑠璃』研究報告』(日仏 2 国語版)、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2011 年
- Université Marc Bloch et Université Waseda, *Traditions et transformations dans le théâtre en France et au Japon du XV^e au XX^e siècle*, Publications orientalistes de France, 2008
- Théâtre/Public et Université Waseda, *Scène française, scènes*

japonaises : allers-retours, Théâtre/Public, n° 198, 2010
 Françoise Quillet, *Les écritures textuelles des théâtres d'Asie : Inde, Chine, Japon*, Presses Universitaires de Franche-Comté, 2011
 —, *Théâtre s'écrit aussi en Asie*, L'Harmattan, 2011
 Michel Wasserman, *Claudiel danse Japon*, Classiques Garnier, 2011

戯曲

ジェラルド・ド・ネルヴァル、ジョゼフ・メリー『ハールレムの版画師』、藤田衆訳、七月堂、2008年
 ジョップ『マドゥモアゼル・ルウルウ』、森茉莉訳、2009年 [1973年]、河出書房新社
 真野倫平編訳『グラン＝ギニョル傑作選 ベル・エポックの恐怖演劇』、水声社、2010年
 サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』、岩切正一郎訳、『悲劇喜劇』2011年5月号、pp.94-158
 ジャン・ジュネ『女中たち／バルコン』、渡邊守章訳、岩波書店、2010年
 マルグリット・デュラス、ジャン・コクトー『アガタ／声』、渡邊守章訳、光文社、2010年
 ジャン＝リュック・クールクー、カンタン・フォコンプレ『スルタンの象と少女』、前之園望訳、文遊社、2010年
 ジョエル・ポムラ『時の商人／うちの子は』、横山義志、石井恵訳、れんが書房新社、2011年
 ダヴィッド・レスコ『破産した男／自分みがき』、奥平敦子、佐藤康訳、れんが書房新社、2010年
 フィリップ・ミンヤナ、ノエル・ルノード『亡者の家／プロムナード』、佐藤康、齋藤公一訳、れんが書房新社、2011年
 ミシェル・アザマ『十字軍／夜の動物園』、佐藤康訳、れんが書房新社、2010年
 ミシェル・ヴィナヴェール『いつもの食事／2001年9月11日』、佐藤康、高橋勇夫、根岸徹郎訳、れんが書房新社、2011年
 オリヴィエ・ピィ『お芝居／若き俳優たちへの書翰』、佐伯隆幸、齋藤公一、根岸徹郎訳、れんが書房新社、2010年
 ワジディ・ムアウッド『頼むから静かに死んでくれ』、山田ひろ美訳、れんが書房新社、2010年
 ヤン・ファープル『変身のためのレクイエム』、宇野邦一訳、書肆山田、2010年
 ヤン・アングレ『雪／Neige』(日仏2カ国語版)、藤井慎太郎訳、エスパス34出版、2010年
 ギィ・フォワシイ「派遣の女」、佐藤康訳、『テアトロ』2010年6月号、pp.126-153

クワン・タワ「毘」、佐藤康訳、『テアトロ』2012年1月号、pp.72-98
 ジャン・ポール・アレーグル「天国への二枚の切符」、岡田正子訳、『テアトロ』2011年5月号、pp.108-146

翻訳その他

ピエール・ラモ「ダンス教師(1)」『聖徳大学言語文化研究所論叢』第18号、市瀬陽子訳、聖徳大学出版会、2010年、pp.283-320
 —「ダンス教師(2)」『聖徳大学言語文化研究所論叢』第19号、市瀬陽子訳、聖徳大学出版会、2011年、pp.245-277
 モーリス・メーテルランク「幼児虐殺」『近代』第104号、岩本和子訳、神戸大学、2010年、pp.81-94
 ステファンヌ・マラルメ『マラルメ全集〈4〉書簡(1)』、松室三郎、菅野昭正、清水徹、阿部良雄訳、白水社、2010年
 ポール・ヴァレリー『ヴァレリー集成I』、恒川邦夫訳、筑摩書房、2011年
 —『ヴァレリー集成II』、塚本昌則訳、筑摩書房、2011年
 —『ヴァレリー集成III』、田上竜也、森本淳生訳、筑摩書房、2011年
 —『ヴァレリー集成IV』、山田広昭訳、筑摩書房、2011年
 アンドレ・アントワヌ(編)「自由劇場」、横山義志訳、2011年★
 —「演出についてのおしゃべり」、横山義志訳、2011年★
 —「現代の俳優術」、横山義志訳、2011年★
 アドルフ・アッピア「ドラマと演出の将来」、田中晴子訳、2011年★
 —「リトミック体操と演劇」、田中晴子訳、2011年★
 モーリス・ポトゥシェール「人民劇場」、田中晴子訳、2011年★
 民衆劇場創設委員会「公教育・美術大臣への手紙」、田中晴子訳、2011年★
 フィルマン・ジェミエ「明日の演劇とシェイクスピア協会」、田中晴子訳、2011年★
 ジャック・コポー「ドラマ革新の試み」、田中晴子訳、2011年★
 ジャン・ジュネ「アメリカに向けてジッパーを下ろす」『ユリイカ』2011年1月号、鶴飼哲訳、pp.52-59
 —「あるアンケートへの回答」『ユリイカ』2011年1月号、根岸徹郎訳、pp.60-64
 —『公然たる敵』、アルベール・ディシイ編、鶴飼哲、梅木達郎、根岸徹郎、岑村傑訳、月曜社、2011年

2. 学術論文

中世・17世紀・18世紀

- 片山幹生「十三世紀演劇テキストの流動性——初期フランス語演劇作品と語りものジャンル」『西洋比較演劇研究』第10号、日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会、2011年、pp.45-58
- 小澤祥子「中世ファルスと狂言の比較——人間関係の対立における第三者の役割」『仏語仏文学』第36号、関西大学フランス語フランス文学会、2010年、pp.57-74
- 黒岩卓「『我らが主の受難の聖史劇』（サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館所蔵写本1131収録）の孤立詩行の評価について」『Nord-est』第3・4号、仏文学会、2011年、pp.70-82
- Michael DESPREZ, « L'alexandrin comme moyen de restitution de la tragédie antique : Quelques réflexions sur les traductions du *Cyclope* par Alessandro Pazzi de' Medici (1524) et de *l'Electre* par Lazare de Baif (c.1529) », 『フランス語フランス文学研究』第97号、仏文学会、2010年、pp.31-45
- 川那部和恵, « Le Jeu d'errance entre le sacré et le profane : Sots en quete de la connaissance de soi dans le théâtre profane des XV^e et XVI^e siècles », *Le voyage créateur*, L'Harmattan, 2010, pp.37-44
- 友谷知己「ラシーヌに於ける悲劇的人物のコンセプト——中庸・過誤・良さ」『演劇映像学2010』、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2011年、pp.259-277
- 永盛克也「ラシーヌ悲劇の生成過程」『文学作品が生まれるとき——生成のフランス文学』、田口紀子、吉川一義編、京都大学学術出版会、2010年、pp.57-81
- , « Racine et Sénèque. L'échec d'un idéal stoïcien dans la tragédie racinienne », *Société d'étude du XVII^e siècle*, PUF, 2010, pp.411-421
- , « Les étapes de la composition d'une tragédie racinienne », *Comment naît une œuvre littéraire? Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques*, eds. Kazuyoshi Yoshikawa et Noriko Taguchi, Champion, 2011, pp.25-38
- 藤本武司「ラシーヌの作品と時間」『Gallia』第50号、大阪大学フランス語フランス文学会、2010年、pp.115-123
- 石川友弘「聖史と悲劇：『アタリ』と＜ユダヤ悲劇＞の可能性」『人文学報』第451号、首都大学東京都市教養学部、2010年、pp.1-46
- 千川哲生「神の表現と回心——1640年代のキリスト教悲劇を中心に」『人文研紀要』第67号、中央大学人文科学研究所、2010年、pp.47-70
- 秋山伸子, « Esthétique théâtrale des Annales galantes : le cas de "Dom Sébastien" », *Madame de Villedieu et le théâtre* (Biblio 17), n° 184, 2009
- 「コルネイユと仕掛け芝居」『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.40-75
- , « Corneille et ses pièces à machines », *XVII^e siècle*, n° 248, 2010, pp.403-417
- , « Molière notre contemporain », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.76-79
- , « Alceste de Quinault et de Lully », 『青山フランス文学論集』復刊第20号、青山学院大学フランス文学会、2011年、pp.17-30
- 井村順一「コルネイユの『小さな悲劇』——『舞台は夢』五幕三場の分析」『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.114-142
- 小倉博孝「燃える洪水——『ディットとベレニス』について」『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.143-179
- ミッチェル・グリーンバーグ「舞台における死——コルネイユと絶対悲劇」、小倉博孝、富田高嗣訳、『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.222-267
- ミカエル・デブレ「コルネイユ——イタリアの影響、またはアリストテレスをめぐる大混乱」、岡見さえ、野呂康訳、『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.182-221
- クリスチャン・ビエ「コルネイユと諸矛盾の問題」、白石嘉治訳、『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.10-39
- 「フランスにおけるピエール・コルネイユの劇作品の演出」、永盛克也訳、『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.348-374
- ヘンリー・フィリップス「コルネイユと教会——倫理と劇作法」、小倉博孝、西村光弘訳、『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.76-113
- ニコラウス・ミュラー＝シュル「怪物的なもの、常軌を逸したもの——レッシングによるコルネイユ像、レッシング後のコルネイユ像」、小倉博孝、畠山香奈訳、『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.222-267
- 村瀬延哉「コルネイユ劇のキーワード(1)」『クインテット』第30号、「クインテット」刊行会、2010年、pp.7-40
- 「コルネイユ劇のキーワード(2)」『クインテット』第31号、「クインテット」刊行会、2011年、pp.23-61
- Alain Couprie, « Sur la mise en scène de *Dom Juan* », 『青山フランス文学論集』復刊第18号、青山学院大学、2009年、pp.55-61
- « Être actrice au XVII^e siècle : Marquise-Thérèse Du Parc (1633?-1668) et La Champmeslé (1642-1698) », 『青山フランス文学論集』復刊第18号、青山学院大学、2009年、pp.62-68
- 末松壽, « L'Esprit folet comme source de *Dom Juan* », 『フラ

ンス語フランス文学研究』第97号、仏文学会、2010年、pp.1-14

鈴木暁「『町人貴族』を読む」『跡見学園女子大学文学部紀要』第44号、跡見学園女子大学、2010年、pp.129-145

片木智年「コケトリーの鏡、もしくは17世紀の風俗喜劇」『藝文研究』第101号、慶應義塾大学藝文學會、2011年、pp.182-194

森元庸介「17世紀演劇論争を再考するために：決疑論をプリズムとして」『フランス語フランス文学研究』第99号、仏文学会、2011年、pp.131-147

横山義志「アリストテレスの演技論——非音楽劇の理論的起源」『演劇学論集』第52号、日本演劇学会、2011年、pp.1-25

浦山健太郎「フランス演劇における唾者と演劇美学の変容(1799-1853)」『関東支部論集』第16号、仏文学会、2007年、pp.65-75

——、「L'enfant sourd-muet sur scène : la dramaturgie de l'infirmité dans *L'Abbé de l'Épée* », 『人文学報』第436号、首都大学東京都市教養学部、2010年、pp.1-26

中山智子、「Effet des vaudevilles renforçant l'équivoque du travestissement dans les opéras-comiques du théâtre de la Foire : *Arlequin fille malgré lui* (1713), *Colombine Arlequin ou Arlequin Colombine* (1715) et *Tiresias* (1722) », 『京都外国語大学研究論叢』第75号、京都外国語大学国際言語平和研究所、2010年、pp.105-120

——、「Exploitation métathéâtrale du travestissement dans *Tiresias* de Piron », 『京都外国語大学研究論叢』第76号、京都外国語大学国際言語平和研究所、2010年、pp.101-111

——、「Condamnation de l'équivoque du travestissement au théâtre français du 18^e siècle », 『京都外国語大学研究論叢』第77号、京都外国語大学国際言語平和研究所、2011年、pp.65-75

青山昌文「デイドロ演劇論研究：役者の演技の在り方について」『放送大学研究年報』第28号、放送大学、2010年、pp.55-61

武田清「デイドロに演技論を書かせた女優たち」『文芸研究』第114号、明治大学文芸研究会、2011年、pp.157-172

白川理恵「『演劇に関するダランベール氏への手紙』におけるルソーのポレミック：メッセージの受け手の問題」『関東支部論集』第18号、仏文学会、2009年、pp.43-57

奥香織「社会の演劇性を明かす装置としての喜劇—マリヴォー『いさかい』をめぐって—」『演劇映像学2009』、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2010年、pp.35-52

——「マリヴォー『奴隷島』における社会の表象—役割交換の手法とその機能をめぐって—」『演劇映像学2010』、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2011年、pp.1-16

酒井三喜「エリック・ロメールとマリヴォー演劇」『映画と文学』、白百合女子大学言語・文学研究センター編、弘学社、2010年、[s.p.]

林精子「18世紀フランスにおけるマリ・サレの舞台衣裳改革の試み：白いモスリンのギリシア風ローブの表象」『Costume and textile : journal of costume and textile』第12(1)号、服飾文化学会、2011年、pp.21-34

19世紀・20世紀

日比野雅彦「『三銃士』に見られる劇的語法の秘密」『こころとことば』第7号、人間環境大学、2008年、pp.37-46

三枝大修「『幻想演劇』とは何か：ジョルジュ・サンド『幻想演劇論』を読む」『フランス語フランス文学研究』、第97号、仏文学会、2010年、pp.135-147

——「幻想演劇と『俯瞰』の主題について——バイロン『カイン』とフロベール『聖アントワヌの誘惑』を中心に」『言語態』第11号、東京大学言語態研究会、2011年、pp.27-40

横田宇雄「エミール・ゾラの自然主義演劇における背景幕の機能」『人文科学論集』第20号、学習院大学、2011年、pp.233-253

ミカエル・デブレ「演劇という名の魅惑、大衆小説と演劇の称揚——ゴージェ『キャピテン・フラカス』」『Les Lettres françaises』第30号、上智大学フランス語フランス文学紀要編集委員会、2010年、pp.81-91

佐々木滋子「大衆・フランス精神・典型：マラルメの「演劇」に関する覚書」『言語文化』第47号、一橋大学、2010年、pp.17-44

Eric Avocat, « Romain Rolland, dramaturge révolutionnaire », 『フランス語フランス文学研究』第97号、仏文学会、2010年、pp.73-86

永田道弘「見失われた妖精劇——19世紀後半～バル＝エポック期におけるパリのスペクタクル」『名古屋短期大学研究紀要』第45号、名古屋短期大学、2007年、pp.201-211

白田由樹「サラ・ベルナルと同時代の女性たち」『女性空間』第28号、日仏女性資料センター、2011年、pp.109-121

内田智秀「草稿、書簡に見る『青い鳥』構想について：ベルギー、アルベール1世王立図書館所蔵メーテルランク資料を中心に」『仏文学会中部支部研究報告集』第31号、仏文学会、

2007年、pp.63-73

——「メーテルランクにおける新プラトン主義の影響」『仏文学会中部支部研究報告集』第33号、仏文学会、2009年、pp.1-16

——、「L'image de l'oiseau bleu conçu par Maeterlinck: Symbole de déni du bonheur populaire né en cours de processus génétique」、『テキスト布置の解釈学的研究と教育』第4号、名古屋大学大学院文学研究科、2010年、pp.79-95

——「メーテルランク『青い鳥』の草稿研究：チルチルの幸福の解釈について」『HERSETEC = テキスト布置の解釈学的研究と教育』、名古屋大学大学院文学研究科グローバル COE プログラム、2011年、pp.125-146

——「メーテルランク『青い鳥』の「森」をめぐる」『仏文学会中部支部研究報告集』第35号、仏文学会、2011年、pp.19-34

中筋朋「メーテルランク的一幕劇における「生の劇」の可能性——受動的感嘆が〈劇〉になるとき」『仏文研究』第38号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、2007年、pp.15-34

——「19世紀末演劇論における役者の表現への両義的態度：身体演劇性」『フランス語フランス文学研究』第99号、仏文学会、2011年、pp.195-210

真野倫平「グラン＝ギニョル劇と精神医学」『仏文学会中部支部研究報告集』第35号、仏文学会、2011年、pp.35-47

——「文学と医学の接点——グラン＝ギニョル劇とシャルコー」『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第17号、南山大学ヨーロッパ研究センター、2011年、pp.1-12

芳野まい「流行という媒体：第一次大戦前の劇場と『失われた時を求めて』」『研究年報』第56号、学習院大学、2009年、pp.117-137

小田中章浩「戦争とメロドラマ：第一次大戦下のフランス演劇における女性の表象」『人文研究』第62号、大阪市立大学、2011年、pp.25-44

村上吉男「ヴェーユ身体論——デイドロヤカントとの比較」『人文科学研究』第126号、新潟大学人文学部、2010年、pp.5-34

角井誠「真実と扮装——ジャン・ルノワールと1920年代フランス映画の演技理論」『Résonance』第7号、東京大学教養学部フランス語・イタリア語部会、2011年、pp.9-16

荒井潔「アントナン・アルトーにおける「自画像」の問題」『防衛大学校紀要 人文科学分冊』第100号、防衛大学校、2010年、pp.31-58

——「アントナン・アルトーにおけるペストの問題」『防衛

大学校紀要 人文科学分冊』第102号、防衛大学校、2011年、pp.49-76

大野朝子「『アルラウネ』から『近親相姦の家』へ——アナイス・ニンの推敲の過程にみるアントナン・アルトーの影響」『デルタ』第7号、日本ヘンリー・ミラー協会、2010年、pp.25-37

大坪裕幸「秩序と均衡を求めて：アントナン・アルトーと力の演劇」『立教大学フランス文学』第39号、立教大学、2010年、pp.1-19

——「アントナン・アルトーと演劇のカタルシス」『立教大学フランス文学』第40号、立教大学、2011年、pp.125-148

北山研二「アントナン・アルトーの自画像または他者の風景の解体」『ヨーロッパ文化研究』第30号、成城大学、2011年、pp.53-78

熊木淳、「L'avatar de la cruauté : l'évolution de la théorie théâtrale d'Antonin Artaud」, *Société d'histoire du théâtre*, n° 251, 2011, pp.311-322

——、「Artaud, Kandinsky, Witkiewicz : le dualisme du Théâtre Alfred Jarry」, *Agôn* [En ligne], Points de vue & perspectives, mis à jour le : 01/02/2011, URL : <http://agon.ens-lyon.fr/index.php?id=1617>

堀切克洋「『上演不可能性』という『伝統』——『アルトー事件』をめぐる」『演劇映像学2009』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、pp.73-86

——「アルトーとヴィトラック——演劇におけるユーモア概念をめぐる」『関東支部論集』、仏文学会、2010年、pp.85-98

——「感覚、感性、感受性——「残酷の演劇」における俳優の生理学をめぐる」『演劇研究』第34号、早稲田大学演劇博物館、2011年、pp.77-89

田ノ口誠悟「ジャン・ジロドゥ作『トロイ戦争は起こらない』における戦争の表象——戦争を引き起こす「不明瞭な力」を巡る一考察」『演劇映像』第51号、早稲田大学文学学術院、2010年、pp.103-118

——「想像/創造されるパリ——ジャン・ジロドゥ作『シャイヨの狂女』がはらむ共同体論について」『演劇学論集』第51号、日本演劇学会、2010年、pp.1-18

間瀬幸江「フジタとジロドゥ——知られざる《邂逅》をめぐる」『比較文学年誌』第47号、早稲田大学比較文学研究室、2011年、pp.44-59

渡邊守章、「Le Soulier de Satin ou le grand Jeu transculturel du monde」, *Bulletin de la Société Paul Claudel*, n° 197, Société Paul Claudel, 2010, pp.40-51

尾崎文太「エメ・セゼール 1946-1956：戯曲『そして犬たちは黙っていた』とフランス共産党離党の意味」『言語社会』第4号、一橋大学言語社会研究科、2010年、pp.450-463

岡健司「イヨネスコとシュネデル」『フランス現代作家と絵画』、吉川一義、岑村傑編、水声社、2009年、pp.149-171

井上善幸「『人べらし役』の生理学——プネウマの循環と変貌」『明治大学人文科学研究所紀要』第67号、明治大学人文科学研究所、2010年、pp.210-227

——、「*The idea of nature in Beckett's *The lost ones**」、『明治大学教養論集』第454号、明治大学教養論集刊行会、2010年、pp.1-13

Véronique Védrenne, « Le théâtre tardif de Samuel Beckett : de la « dis-location » au « suspens » de l'image scénique », 『言語文化研究』第37号、大阪大学大学院言語文化研究科、2011年、pp.251-264

岡室美奈子「ベケットと幽霊テクノロジー：テレビドラマ『…雲のように…』における脳内イメージの投射について」『表象・メディア研究』第1号、早稲田表象・メディア論学会、2011年、pp.11-41

尾沼忠良「S・ベケット 1946年フランス語作品(1)」『文学部紀要』第23-1号、文教大学、2009年、pp.1-15

——「S・ベケット 1946年フランス語作品(2)」『文学部紀要』第24-2号、文教大学、2011年、pp.23-40

垣口由香「声のための創作——サミュエル・ベケットの「声」と「聞くこと」」、『言語文化研究』第9号、静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会、2010年、pp.1-13

片岡昇「サミュエル・ベケットの『芝居』と『フィルム』における視線の自己言及性」『演劇映像学 2009』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2010年、pp.165-178

——「サミュエル・ベケットの『…雲のように…』における想起の構造について」『演劇学論集』第51号、日本演劇学会、2010年、pp.19-37

——「非合理の消尽：サミュエル・ベケットの『クウッド』に内在する不規則性の分析」『表象・メディア研究』第1号、早稲田表象・メディア論学会、2011年、pp.43-66

川島健「廃墟の存在論：サン・ローのサミュエル・ベケット」『英文学研究』第86号、日本英文学会、2009年、pp.1-16

——「境界線の女たち：1930年代ダブリンの公的空間をめぐるベケットの詩」『英文学研究』第88号、日本英文学会、2011年、pp.19-32

岸本佳子「サミュエル・ベケットとカメラアイの隠喩——『ブルースト』・『芝居』・『わたしじゃない』——」『演劇映像

学 2009』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2010年、pp.109-126

——「サミュエル・ベケットと聴覚・視覚の相克——『残り火』から『あのとき』・『あしおと』へ——」『演劇映像学 2010』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2011年、pp.183-200

景英淑「『ゴドーを待ちながら』における劇構造、記憶、そして時間」『演劇映像学 2009』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2010年、pp.127-146

——「機械と女神たちの闘——『クラブの最後のテープ』再考——」『演劇映像学 2010』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2011年、pp.65-82

久米宗隆「サミュエル・ベケットの『すべて倒れんとする者』におけるラジオドラマ性——C・G・ユングの影響を中心に——」『演劇映像学 2009』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2010年、pp.147-164

——「鳥になること、歌を歌うこと——『しあわせな日々』における生成変化を巡って——」『演劇映像学 2010』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2011年、pp.201-220

鈴木哲平「サミュエル・ベケットの「新しい文体」：『名づけえぬもの』以降の散文作品における「動詞」をめぐる」『関東支部論集』第18号、2009年、仏文学会、pp.125-137

——「詩学としてのコミュニケーション的不安——サミュエル・ベケット『メルシエとカミエ』」『仏語仏文学研究』第40号、東京大学仏語仏文学研究会、2010年、pp.75-96

——、「*De l'écriture à la « voix » : La mort dans *Malone meurt et En attendant Godot* de Samuel Beckett*」、『仏語仏文学研究』第41号、東京大学仏語仏文学研究会、2011年、pp.77-91

高山典子「サミュエル・ベケット『芝居』のスポット・ライト——パフォーマンスを通じた可変性」『仏語仏文学研究』第40号、東京大学仏語仏文学研究会、2010年、pp.97-112

——、「*La scène hantée des voix sans bouche : Les mémoires ratées dans *Cette fois* de Samuel Beckett*」、『フランス語フランス文学研究』第98号、仏文学会、2011年、pp.89-101

塚本昌則「内なる対話——ヴァレリーからベケットへ」『仏語仏文学研究』第42号、東京大学仏語仏文学研究会、2011年、pp.155-169

対馬美千子「ベケット作品における痛みと表象の問題」『論叢』第3号、筑波大学人文社会科学研究所、2009年、pp.1-24

——「ベケットにおける〈女性的なるもの〉と〈傷〉」『論叢』第6号、筑波大学人文社会科学研究所、2011年、pp.1-16

- 深谷公宣「ベケットの『フィルム』——クローズアップ、情動イメージ、喜劇役者」『富山大学芸術文化学部紀要』第3号、富山大学芸術文化学部、2009年、pp.128-135
- 「ミュージック・ホール、モダニズム、映画——T・S・エリオットとサミュエル・ベケットにおける神話とポピュラー文化」『富山大学芸術文化学部紀要』第4号、富山大学芸術文化学部、2010年、pp.130-144
- 藤原曜、「La vision et l'audition dans « Assumption » de Samuel Beckett」、『年報フランス研究』第43号、関西学院大学フランス学会、2009年、pp.41-52
- 宮脇永吏「サミュエル・ベケット『名づけえぬもの』におけるアーノルド・ゲーリンクス『エチカ』の痕跡：「三重の主体」」『人文科学論集』第19号、学習院大学、2010年、pp.223-238
- 「サミュエル・ベケットの『エレウテリア』における「二元論的空間」——内的自由の視覚化——」『演劇映像学2010』、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2011年、pp.145-164
- 谷上れい子「Beckett 劇『…雲のように…』における亡霊：W.B.Yeats の影響を受けて」『言語文化研究』第16号、言語文化研究所、2009年、pp.43-65
- 吉田雄高「ベケットにおける無いことへの志向と媒体への志向」『文化交流研究』第6号、筑波大学文化交流研究会、2011年、pp.49-71
- 大森晋輔「ピエール・クロソフスキーの作品における演劇性の研究に関する序論：そのカルメロ・バーネ論をめぐって」『関東支部論集』第17号、仏文学会、2008年、pp.185-198
- 「シミュラクルとスペクタクル：ピエール・クロソフスキーにおける神学と演劇」、『LAC ワークショップ論文集』、Vol.2、2009年、pp.41-50
- 、「Vers une « nouvelle langue » de la communication : La théâtralité dans les écrits sur la peinture de Pierre Klossowski」、『フランス語フランス文学研究』、第97号、仏文学会、2010年、pp.93-107
- 郷原佳以「合一しないこと、あるいは、果てなき愛——ジュネ／ブランショ」『ユリイカ』2011年1月号、pp.200-209
- 福島勲「陰画の文学——バタイユのジュネ論から」『文学』2011年1月号、岩波書店、pp.143-163
- 藤井律子「不在と共にある生——ジャン・ジュネ『葬儀』における語り手のナルシス的軌跡」『文化交流研究』第5号、筑波大学文化交流研究会、2010年、pp.71-91
- 宮崎裕助「革命の印璽から残ったもの——ジャン・ジュネ『恋する虜』の余白に」『ユリイカ』2011年1月号、pp.190-199
- フランソワ・ビゼ「ジャン・ジュネを批評するジョルジュ・バタイユ」『ユリイカ』2011年1月号、荻野厚志訳、pp.100-114
- 川那部和恵、「Sur la relation acteur/public dans la notion de "théâtre pauvre" de Jerzy Grotowski」、『Revue des Sciences Humaines』、Presses universitaires de Lille, no 304, 2011, pp.147-153
- 稲村真実「エレヌ・シクスー（へ）の接近：現在で書く」『立教大学フランス文学』第38号、立教大学、2009年、pp.107-118
- 「素描するエクリチュール：エレヌ・シクスーの「絶え間なく」の試みをめぐって」『立教大学フランス文学』第39号、立教大学、2010年、pp.21-37
- 中筋朋「マルグリット・デュラスの戯曲における演劇性の変容：『ラ・ミュジカ第二』（1985）における「誠実な現実」」『関西フランス語フランス文学』第15号、仏文学会、2009年、pp.61-73
- ヴァンサン・ブランクール「不確かな存在としての舞台——演劇に関するコルテスの考察について」『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第51号、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2010年、pp.119-129
- 井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナ『セヌ』における供儀と祝祭」『美学』第61号、2010年、pp.25-36
- 「ヴァレール・ノヴァリナの詩学——『時間の動物』をめぐって」『フィロカリア』第28号、大阪大学大学院文学研究科、2011年、pp.1-11
- 中筋朋「舞台上の存在力学と「在りて在る者」についての試論——ヴァレール・ノヴァリナにおける《Je suis》をめぐって」『仏文研究』第41号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、2010年、pp.21-38
- ダンス研究・オペラ研究**
- 江花輝昭「身体の饗宴——宮廷バレエからコメディ・バレエへ」『フランス文化研究』第41号、獨協大学外国語学部、2010年、pp.1-50
- 赤塚健太郎「舞踏譜《ラ・ボカンヌ》と、その伴奏舞曲を伝える諸資料の比較研究」『武蔵野音楽大学研究紀要』第43号、武蔵野音楽大学、2011年、pp.23-40
- 清水康子「フランス文学における舞踊(IV)：古典主義の時代から啓蒙主義の世紀へ(3)」『研究紀要』第45号、国立音楽大学、2010年、pp.25-36
- 「フランス文学における舞踊(V)：古典主義の時代から啓

蒙主義の世紀へ(4)『研究紀要』第46号、国立音楽大学、2011年、pp.73-84

内藤義博、「Le Devin du village de Rousseau est-il un opera pastoral?」、『仏語仏文学』第46号、関西大学、2010年、pp.37-55

市瀬陽子「オペラ演技考 基礎教育における一提案」『聖徳大学研究紀要』第18号、2007年、pp.49-56

——「バレエ教育における舞踊史の意義」『聖徳大学研究紀要』第19号、2008年、pp.57-63

——「Les Caracteres de la Danse (ダンスさまざま) ——ダンスの様々な表情——『ル・メルキュール』誌(1721)のパロディを通して」『聖徳大学研究紀要』第21号、2010年、pp.95-102

森佳子「オフエンバックの《にんじん王》初演における「風刺」——第二帝政と第三共和政の狭間で」『西洋比較演劇研究』第10号、日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会、2011年、pp.89-101

大鐘敦子「フローベール『ヘロディアス』生成研究——第一のダンスの形成」『関東学院教養論集』第20号、関東学院大学法学部、2010年、pp.1-25

渡辺響子「エミール・ゾラ オペラ『メシドール』」『明治大学教養論集』第454号、明治大学教養論集刊行会、2010年、pp.235-242

村上由美「マラルメにおける舞踏——バレエ評論に見られる具体的イメージと詩的イメージ」『フランス文学語学研究』第29号、早稲田大学大学院文学研究科、2010年、pp.71-85

——「マラルメにおけるロイ・フラーの問題：「もうひとつの舞踊論～バレエにおける背景、最近の事例に基づいて」から」『関東支部論集』第19号、仏文学会、2010年、pp.69-83

——「ステファンヌ・マラルメのバレエ評論の再読解——失われたバレエ《ヴィヴィアース》とマラルメのバレエ論をめぐって」『演劇映像学 2010』、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2011年、pp.91-109

荒原邦博「プルーストにおけるドガの諸問題 (1) ダンスをめぐる美学と時間の誕生」『明學佛文論叢』第43号、明治学院大学文学会、2010年、pp.57-89

伊藤亜紗「ヴァレリーにおける詩の「純粋性」と身体への生理学的関心」『美学』第57号、美学会、2007年、pp.15-28

——「描写なき文学としての詩——ヴァレリーにおける読者の身体の主題化」『美学』第62号、美学会、2011年、pp.1-12

——「「関係性の美学」の演劇的性格」『美学芸術学研究』第30号、東京大学大学院人文社会系研究科、2011年、pp.23-

44

——「ヴァレリーのリズム論」『國學院雑誌』第112(3)号、國學院大學総合企画部、2011年、pp.1-14

安見貴子「ヴァレリー「魂と舞踊」：バレエの記憶を辿って」『人間文化創成科学論叢』第12号、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、2010年、pp.63-71

富田大介「P・ヴァレリーにおける運動的陶醉のメカニズム：「私」を脱して自走するダンスの考察に向けて：「魂と舞踊」「ダンスについて」「ダンスの哲学」読解」『美学芸術学論集』第6号、神戸大学、2010年、pp.21-37

安田静「19世紀～20世紀前半のバレエ作品と音(楽)」『研究紀要』第55号、日本大学経済学部、2007年、pp.1-11

——「パリ・オペラ座のダンサーとその観客：19世紀の特権的アボネの「踊り子」から20世紀の「芸術家」へ」『研究紀要』第65号、日本大学経済学部、2010年、pp.43-56

——「アボネの服装規定変遷にみるパリ・オペラ座の「大衆化」について」『研究紀要』第68号、日本大学経済学部、2011年、pp.37-55

澤田肇「バルザックとゴーティエ——オペラと創作にまつわる二人の友情」『Les Lettres francaises』第30号、上智大学フランス語フランス文学紀要編集委員会、2010年、pp.69-80

小山聡子「テオフィル・ゴーチエによるバレエ——現代舞踊論の幕開け」『Les Lettres francaises』第30号、上智大学フランス語フランス文学紀要編集委員会、2010年、pp.105-115

岡見さえ「『薔薇の精』をめぐる変奏——詩から20世紀のバレエへ」『Les Lettres francaises』第30号、上智大学フランス語フランス文学紀要編集委員会、2010年、pp.117-125

間野嘉津子「バレエ・リュスのパリ初公演の成功とディアギレフの総合芸術の勝利」『大阪経大論集』第62号、大阪経大学会、2011年、pp.71-79

北原まり子「バレエ《春の祭典》(1913年初演)における「300歳の老婆」の表象」、『演劇映像学 2009』第1集、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2010年、pp.163-182

——「供犠の表象の変質—第二の《春の祭典》(マシーン振付、1920年初演)における変更—」『演劇映像学 2010』第1集、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2011年、pp.111-130

吉田未央「バレエリュス『春の祭典』の受容：ジャック＝エミール・ブランシュ『1913年の芸術的総括』分析」『比較文学・文化論集』第27号、東京大学比較文学・文化研究、2010年、pp.51-61

関典子「バレエ・リュスとシュルレアリスムの邂逅——『パ

ラード』(1917)を起点として『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第4号、神戸大学、2011年、pp.83-94

成田麗奈「バレエ・スエドワ(1920-1925)と前衛音楽家としての「フランス六人組」イメージの形成をめぐる一考察」『東京藝術大学音楽学部紀要』第37号、東京藝術大学音楽学部、2011年、pp.77-94

森美樹「アンリ・マティスによる、バレエ「赤と黒」のための舞台装飾について」『研究紀要』第16号、愛知県美術館、2010年、pp.5-39

安田静「パリジャンが見たアメリカン・バレエ・シアター(1940-1958)」『研究紀要』第56号、日本大学経済学部、2007年、pp.75-84

深澤南土実「ローラン・プティ《若者と死》:「生」の象徴としての「若者」」『人間文化創成科学研究科』第14号、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、2011年、pp.117-125

並木浩一「デジタル映像アーカイブは映画研究にどう寄与するか——バレエ映画を例に」『Cre biz』第5号、映画専門大学院大学定期文集編集委員会、2010年、pp.44-54——「1960年代～1980年代の写真集メディアとモーリス・ベジャール」『大同大学紀要』第47号、大同大学研究・産学連携支援室、2011年、pp.131-138

越智雄磨「反スペクタクルの身振り——ノン・ダンス(non-danse)という概念をめぐる」『演劇映像』第51号、早稲田大学文学学術院、2010年、pp.91-102

——「ジェローム・ベル《The Show Must Go On》分析」『早稲田大学文学研究科紀要』第56号(第3分冊)、早稲田大学文学研究科、2011年、pp.17-34

——「フランスにみるアメリカのポスト・モダンダンスの影響——クアトゥオール・アルブレヒト・クヌストの活動を巡って」『演劇映像学2010』、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2011年、pp.189-207

安田静、「“La chorégraphie est-elle un art éphémère? — Angelin Preljocaj, militant de la notation chorégraphique et sa réponse”」, *Research Bulletin (Liberal Arts)*, Nihon University College of Economics, vol.59, 2008, pp.101-119

——「舞踊の稽古場における鏡とボディ・イメージ形成に関わる諸問題について——パリ・オペラ座バレエ団レパートリーに見るコンテンポラリー作品を中心として」『研究紀要』第66号、日本大学経済学部、2011年、pp.123-134

アニー・シュケ「ステージ——踊る身体:知覚の実験室」『身体の歴史』、アラン・コルバン他監修、下澤和義訳、藤原書店、2010年、pp.475-501

文化政策

長嶋由紀子「フランス文化政策分権化の進行と「協力」の制度化——地域文化施設運営の問題を中心に——」『演劇映像学2009』第2集、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2010年、pp.49-66

藤井慎太郎「フランスの舞台芸術環境」『公共劇場の10年——舞台芸術・演劇の公共性の現在と未来』、伊藤裕夫、小林真理、松井憲太郎編、美学出版、2010年、pp.136-158

——「ネーションの舞台:ケベックとフランダースの舞台芸術と表象の政治学」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第55報、第3分冊、2010年、pp.5-20

——, « Théâtre et nation : réflexions sur l'essor du spectacle vivant au Québec et en Flandre », 『演劇映像学2010』、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2011年、pp.177-197

八木雅子「Musée か Centre か:国立舞台衣装装置センターv(CNCS)の意義」『研究年報』第56号、学習院大学、2009年、pp.247-264

日仏交流史・日仏比較文化論

渡邊守章, « “Classique” et “tradition”: La réception des arts de la scène entre la France et le Japon », trad. Benjamin Giroux, *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.11-16

Chris BELOUAD, « Leon de Rosny et la spiritualité de l'Orient: Une dernière incarnation du paradigme philologique de la “Renaissance Orientale”? », 『Gallia』第50号、大阪大学フランス語フランス文学会、2010年、pp.23-32

——「レオン・ド・ロニー『青竜寺』(1872)の構造と物語:フランス演劇初の「日本」をめぐる」、『Gallia』第51号、大阪大学フランス語フランス文学会、2011年、pp.11-20

Jean-Jacques Tschudin, « La découverte du théâtre par les voyageurs français dans le Japon de Meiji », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.23-26

伊藤洋「日本最初の『ル・シッド』翻案『鎌倉武鑑』について」『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.305-346

大橋裕美「二代目市川左団次によるモリエール劇——草野柴二訳『結婚療法』初演をめぐる」『西洋比較演劇研究』第9号、日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会、2010年、pp.17-32

根岸理子「マダム花子:「日本」を伝えた国際女優」『演劇学論集』第53号、日本演劇学会、2011年、pp.43-59

Béatrice Picon-Vallin, « Un choc esthétique et culturel: Sada Yacco à Paris », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.26-33

- Nicola Savaresse, « La création d'un monstre sacré : L'information et la critique sur le phénomène Sada Yacco à Paris », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.34-39
- 林正和, « L'apport du théâtre français dans les années 1920 : la figure de Kunio Kishida », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.39-41
- 西野絢子「ポール・クローデルの能解釈 : 西洋における能の受容史の中で」『関東支部論集』第17号、仏文学会、2008年、pp.123-135
- « L'influence du théâtre Nô sur la synthèse des arts de Paul Claudel », *Bulletin de la Société Paul Claudel*, n° 201, Société Paul Claudel, 2011, pp. 64-67
- 「ポール・クローデルと能 : 狂言をめぐる沈黙」『藝文研究』第101(2)号、慶應義塾大学藝文學會、2011年、pp.102-117
- 岡健司, « Eugène Ionesco et le Japon », *Lire, jouer Ionesco : colloque de Cerisy, Solitaires intempestifs*, 2010, [s. p.]
- 安永愛「ルネ・シフェールの能楽論翻訳をめぐる : 鏡の中の芸道論」『翻訳の文化/文化の翻訳』第6号、静岡大学、2011年、pp.1-30
- Mikio TAKEMOTO, « Hisao Kanze, une quête du nô et de la théâtralité », trad. Patrick De Vos, *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.41-43
- 奥香織, « La tournée de la compagnie Renaud-Barrault au Japon et les échanges culturels », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.44-46
- 清水義和「デイドロの『盲人書簡』と寺山修司の『盲目書簡』に於ける闇の世界」『愛知学院大学教養部紀要』第57(3)号、愛知学院大学、2010年、pp.61-80
- 岑村傑「ジャン・ジュネの受容史のために : 朝吹三吉訳『泥棒日記』と三人の守護聖人 石川淳、三島、安吾」『藝文研究』第101(2)号、慶應義塾大学藝文學會、2011年、pp.23-45
- 辻本千鶴「松浦理英子『犬身』論——ジュネとガーネットの受容を視座として」『言語文化論叢』第5号、京都橘大学文学部野村研究室、2011年、pp.59-70
- Sylviane PAGÈS, « La réception du butô dans la danse contemporaine en France : contre-modèle esthétique et résurgence expressionniste », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.47-50
- Odette ASLAN, « Sade, Genet, Mishima : Du butô de Hijikata aux mises en scènes françaises », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.50-54
- Dominique DUPUY, « Rêver, rencontrer, vivre le Japon, la merveilleuse découverte des actes du mouvement au Japon par deux danseurs français de la deuxième moitié du XX^e siècle », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.55-59
- 藤井慎太郎, « Jouer, créer ensemble - bilan et réflexions sur les collaborations franco-japonaises », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.60-66
- Cristophe Triau, « Le détour japonais : Fisbach, Gutmann, Meysat », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.67-71
- Stanca SCHOLZ-CIONCA, « Sans surtitres : Le heurt des idiomes dans le théâtre d'Oriza Hirata », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.72-75
- Emmanuel WALLON, « Airbus et bunraku : Les relations franco-japonaises de l'art à l'industrie », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.106-111
- 間瀬幸江, « Souvenirs acoustiques de 4.48 psychose de Sarah Kane mis en scène par Norimizu Ameya », *Théâtre/Public*, n° 197, 2010, pp.102-106
- 武部好子, « The Effect of Translated Plays : Samuel Beckett and Japanese Theatre », 『通訳翻訳研究』第11号、日本通訳翻訳学会、2011年、pp.113-122
- 芳野まい, « Le travail de traduction dans le cadre d'une création théâtrale interculturelle : *El Don Juan* d'Omar Porras », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.79-81
- 「演劇における翻訳・台本作成の問題——静岡県舞台芸術センター『ドン・ファン』公演の例から」『総合社会科学研究』第3号、総合社会科学会、2011年、pp.61-72
- 修士論文
- 長谷恒雄「モリエール劇におけるモノローグに関する研究 (Étude sur le monologue dans le théâtre de Molière)」(京都大学大学院文学研究科、2010年度)
- 石坂亜希「モーリス・ベジャール振付作品《ボレロ》をめぐる考察—女性版メロディを中心に—」(早稲田大学大学院文学研究科、2009年度)
- 深澤南土実「ローラン・プティ《若者と死》(1946)—表象化された「死」と「生」の象徴「若者」—」(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科、2009年度)
- 西樹里「ベルナール＝マリ・コルテス研究——「プロローグ」をめぐる」(学習院大学大学院人文科学研究科、2009年度)
- 越智雄磨「ジェローム・ベル作品における反スペクタクルの戦略—《The Show Must Go On》を中心に—」(早稲田大学大学院文学研究科、2009年度)
- 藤原江玲「文学とバレエ」(東北大学大学院文学研究科、2010年度)

博士論文

榎本恵子「16, 17世紀フランスにおけるプラウトゥスとテレンティウスの受容 (Plaute et Térence en France aux XVI^e et XVII^e siècles)」(パリ第4大学、2011年1月14日)

伊藤亜紗「身体的機能を開発する装置としての詩—ポール・ヴァレリーにおける作品の位置づけと身体観」(東京大学大学院人文社会系研究科、2010年度)

林正和「西洋演劇と伝統に直面した日本演劇——小山内薫(1881-1928)の演劇活動をめぐって (Le théâtre japonais face au théâtre occidental et à la tradition : l'œuvre théâtrale d'Osanai Kaoru (1881-1928))」(パリ第4大学、2010年3月10日)

熊木淳「変幻する自己——アントナン・アルトの詩学の理論的展開 (L'avatar du Moi : l'évolution théorique de la poétique d'Antonin Artaud)」(リヨン高等師範学校、2011年6月25日)

大森晋輔「ピエール・クロソフスキーの作品における伝達概念と方法としてのドラマトゥルギー」(東京大学大学院総合文化研究科、2010年3月)

景英淑「ベケット作品における円という形象—時間、機械、身体の表象をめぐって」(早稲田大学大学院文学学術院、2011年9月22日)

鈴木哲平「サミュエル・ベケットの〈切断〉の詩学——1940年代における〈メディア的思考〉——」(東京大学大学院人文社会系研究科、2010年度)

3. その他(解説・評論・エッセイなど)

秋山伸子「[わたしのこの一冊] Alain Coupric, *Marquise ou la « Déhanchée » de Racine*, Paris, L'Hartemann, 2006」『日仏演劇協会会報』復刊第2号、2010年、p.4

尼ヶ崎彬「そしてはじまる観客との駆け引きのゲーム——ジェローム・ベル『The show must go on!』」『ダンスマガジン』2012年2月号、p.88

池内紀「自由時間 居酒屋の哲学(第13回) ゴドーを待ちながら」『中央公論』2010年1月号、pp.184-187

石井達朗「日本の伝統精神に通じる感覚——シャルロアダンス『空気と風』」『ダンスマガジン』2011年4月号、p.83

——「身体が語ることのみがすべて——ピーピング・トム『ヴァンデンブランデン通り 32番地』」『ダンスマガジン』2011年2月号、p.87

石川太郎「書評『ベケットとその仲間たち: クツェーから埴谷雄高まで』」『英米文学』第71号、立教大学、2011年、pp.81-83

伊地智均「ソフィアンの本棚 小倉博孝編『コルネイユの劇

世界』」『ソフィア』第59号、上智大学、2010年、pp.331-334

伊藤洋「資料・日本におけるコルネイユ受容——フランス古典劇の翻訳——コルネイユを中心に」『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.415-423

——、井村順一「コルネイユ・フランス古典主義演劇と日本」(対談)、『コルネイユの劇世界』、2010年、pp.375-414

井村順一「書評『フランス十七世紀演劇集 喜劇』」『ふらんす』2010年7月号、p.74

岩波剛「芥川比呂志——ジロドゥから鏡花への知性派」『テアトロ』2011年5月号、pp.14-15

鵜飼哲「明かしえぬ共犯性——ジュネをめぐる二つの集いのこと」『ふらんす』2010年12月号、pp.46-47

宇野邦一「喪の演劇」『ユリイカ』2011年1月号、pp.130-137

旺なつき「『コレット』の人生を演じて」『テアトロ』2011年12月号、pp.18-19

岡見さえ「身体が変容する異空間——グザヴィエール・ロワ『Self Unfinished (1998)』」『ダンスマガジン』2011年10月号、p.90

——「夢幻と現実が交錯する妖しく美しい世界——シルヴィ・ギエム『エオンナガタ』」『ダンスマガジン』2012年2月号、pp.12-13

小田切ようこ「Best choice! 第1回」『テアトロ』2009年12月号、pp.62-63

——「Best choice! 第2回」『テアトロ』2010年1月号、pp.62-63

——「Best choice! 第3回」『テアトロ』2010年2月号、pp.64-65

——「Best choice! 第4回」『テアトロ』2010年3月号、pp.70-71

——「Best choice! 第5回」『テアトロ』2010年4月号、pp.62-63

——「Best choice! 第6回」『テアトロ』2010年5月号、pp.62-63

小田中章浩「書評・紹介 岡室美奈子、森尚也、ブリュノ・クレマン、シェフ・フーパーマンズ、アンジェラ・ムアジャーニ、アンソニー・ウルマン編『今日のサミュエル・ベケット』第十九巻」『演劇映像』第51号、早稲田大学文学学術院、2010年、pp.63-66

——「フランス演劇 2009 確実に進む世代交代」『国際演劇年鑑 2010』、国際演劇協会日本センター、2010年、pp.133-138

——「フランス演劇 2010 太陽劇団の新作など」『国際演劇

- 年鑑 2011』、国際演劇協会日本センター、2011年、pp.108-113
- 片岡昇「国内研究者によるサミュエル・ベケット研究書誌一覧」『演劇映像学 2010』第3集、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2011年、pp.369-411
- 金坂拓「F・アンカースミット「ピュグマリオン：劇場と表象におけるルソーとデイドロ」：論文紹介」『美学芸術学論集』第7号、神戸大学、2011年、pp.78-81
- 金原礼子「十七世紀フランス宮廷の文化——宮廷バレエの展開」『紫明』第27号、紫明の会、2010年、pp.8-11
- 鎌田隆之「書評 真野倫平編訳『グラン＝ギニョル傑作選 ベル・エポックの恐怖演劇』」『仏文学会中部支部研究報告集』第35号、仏文学会、pp.65-67
- 河村錠一郎「『手塚治虫』を通して『日本』を見る——『TeZuKA』世界初演」『ダンスマガジン』2011年12月号、pp.70-71
- 菅孝行「社会と演劇の視野（2）：ゴドーの替りに来たものは…」『テアトロ』2011年7月号、pp.30-34
- 「60年代演劇の萌芽」『テアトロ』2011年9月号、pp.50-59
- 北原まり子「[紹介] バレエ・リュス 100年」『日仏演劇協会会報』復刊第2号、2010年、pp.13-14
- 合田正人「泡と泥のあいだで——ベケットを廻る覚書」『文学』2011年1月号、岩波書店、pp.90-99
- 小林和樹「諷刺を極めて『町人貴族』千百回」『テアトロ』2009年12月号、pp.26-27
- 佐伯隆幸「[書評] 渡邊守章『快樂と欲望～舞台の幻想について～』」『越境する伝統』『日仏演劇協会会報』復刊第2号、2010年、p.12
- 榊原貴教「ミュッセ翻訳作品年表」『翻訳と歴史』第56号、ナダ出版センター、2011年、pp.19-26
- 坂出洋二「笑いとダークサイド——フランス版『屋根裏』を観にゆく（上）」『悲劇喜劇』2010年7月号、pp.62-63
- 「なんだか広い『屋根裏』だった——フランス版『屋根裏』を観にゆく（下）」『悲劇喜劇』2010年8月号、pp.58-61
- 坂原真里「[「孤独な」言葉と観客——「彼方へ 海の讃歌」（クロード・レジ演出）、「若き俳優への手紙」（宮城聰演出）」、SPAC ウェブサイト内、2010年、URL：<http://spac.or.jp/critique/>
- 桜井弘「資料紹介 文楽映画フィルム「MARIONNETTES JAPONAISES」」『演劇映像学 2009』第4集、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2010年、pp.337-342
- 篠井英介「棧敷と閨房——ジュネの女方たち」『ユリイカ』2011年1月号、pp.115-125
- 佐々木涼子「形がことばになる——シェルカウイ×首藤康之『アポクリフ』」『ダンスマガジン』2010年12月号、p.25
- 佐藤実枝「[わたしのこの一冊] 人間と芝居の危険な関係」『日仏演劇協会会報』復刊第2号、2010年、p.3
- 佐藤康「舞台翻訳をめぐる架空のQ & A」『テアトロ』2010年5月号、pp.20-21
- 「ロベール・トマ 裏返しの天才」『W ダブル』公演パンフレット、2010年
- 「『令嬢ジュリー』を読む」『劇場文化』、静岡県舞台芸術センター、2010年
- 「『テーブルに十三人』喜劇研究会から」『劇団 NLT SPOT』2010年10月号
- 「フランス人も迷信ぶかい？」『テーブルに十三人』公演プログラム、劇団 NLT、2010年
- 「ジュネへの、東洋からの真摯な応答 錬肉工房『女中たち』」『図書新聞』2010年11月27日号
- 「世界の劇場——フランス」『「ゴドーを待ちながら」公演プログラム』、新国立劇場、2011年
- 「オレステスの末裔たち」『テアトロ』2012年1月号、pp.24-25
- 佐藤友紀「『苦悩』、そしてパトリス・シェロー」『悲劇喜劇』2011年11月号、pp.41-43
- 三條三輪「乾杯、モリエール様！」『テアトロ』2009年12月号、pp.24-25
- 志賀信夫「ジゼル・ヴィエンヌ・インタビュー～人形がすべての始まりです」『TH』第42号、書苑新社、[s.p.]
- 清水徹「戯曲とダンスの見事な調和——KYOTO EXPERIMENT 渡邊守章『アガタ——ダンスの臨界／語りの臨界』」『ダンスマガジン』2011年3月号、p.88
- 新藤弘子「伝統を超えて輝くエトワールたち」『ダンスマガジン』2010年6月号、pp.10-14
- 鈴木康司、ピエール・ノット「対談『コメディ・フランセーズ今昔』」『日仏文化』第77号、日仏会館、2010年、pp.62-82
- 鈴木創士「ジュネあるいは類似の錯乱」『ユリイカ』2011年1月号、pp.166-172
- 鈴木晶「オペラ座の迷宮第1回 オペラ座の怪人Ⅰ」『ダンスマガジン』2011年3月号、pp.74-77
- 「オペラ座の迷宮第2回 オペラ座の怪人Ⅱ」『ダンスマガジン』2011年4月号、pp.74-77
- 「オペラ座の迷宮第3回 オペラ座の怪人Ⅲ」『ダンスマガジン』2011年5月号、pp.76-79

- 「オペラ座の迷宮第4回 オペラ座のレパトリー I」『ダンスマガジン』2011年6月号、pp.76-79
- 「オペラ座の迷宮第5回 オペラ座のレパトリー II」『ダンスマガジン』2011年7月号、pp.80-83
- 「オペラ座の迷宮第6回 彷徨えるオペラ座 I」『ダンスマガジン』2011年8月号、pp.74-77
- 「オペラ座の迷宮第7回 彷徨えるオペラ座 II」『ダンスマガジン』2011年9月号、pp.76-79
- 「オペラ座の迷宮第8回 彷徨えるオペラ座 III」『ダンスマガジン』2011年10月号、pp.78-81
- 「オペラ座の迷宮第9回 彷徨えるオペラ座 IV」『ダンスマガジン』2011年11月号、pp.78-81
- 「オペラ座の迷宮第10回 彷徨えるオペラ座 V」『ダンスマガジン』2011年12月号、pp.78-81
- 「オペラ座の迷宮第11回 オペラ座の黄金時代 I」『ダンスマガジン』2012年1月号、pp.76-79
- 「オペラ座の迷宮第12回 オペラ座の黄金時代 II」『ダンスマガジン』2012年2月号、pp.82-85
- 関典子「箱の中の遊戯 残酷さを描く距離：池田扶美代+アラン・プラテル+ベンヤミン・ヴォルドング『ナイン・フィンガー』」『明倫 art』2010年4月号、京都芸術センター、p.6
- 扇田昭彦「現代中東の『オイディプス王』——ピープルシアター『焼け焦げるたましい』」『ダンスマガジン』2010年1月号、p.75
- 「被災地のゴドー——新国立劇場『ゴドーを待ちながら』」『ダンスマガジン』2011年7月号、p.84
- 高橋信良「アルトとエロス」『フロイト全集 13』月報、岩波書店、2010年
- 立木樺子「30周年を迎えたフェスティバル——モンペリエ・ダンス・フェスティバル」『ダンスマガジン』2010年10月号、pp.80-81
- 田ノ口誠悟「書評・紹介 間瀬幸江著『小説から演劇へ——ジャン・ジロドゥ 話法の変遷』」『演劇映像』第52号、早稲田大学文学学術院、2011年、pp.64-67
- 恒川邦夫「書評『ヴァレリー——知性と感性の相剋』」『ふらんす』2010年7月号、p.75
- 佃典彦「イヨネスコ『犀』」『悲劇喜劇』2011年8月号、pp.14-15
- パトリック・ドゥ・ヴォス「講演 1980年代の大野一雄：フランスでの舞台評を読む」『舞踊学』第34号、舞踊学会、2011年、pp.92-96
- 友谷知己「[[書評] 千川哲生『論争家コルネイユ フランス古典悲劇と演劇理論』」『日仏演劇協会会報』復刊第2号、2010年、pp.12-13
- 中島廣子「書評『サラ・ベルナール メディアと虚構のミューズ』」『ふらんす』2010年3月号、p.74
- 永盛克也「書評：Georges Forestier, *Jean Racine*, Gallimard (NRF Biographies), 2006」『仏文研究』第39号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、2008年、pp.147-152
- , « *Compte-rendu : John E. Jackson, L'Ambiguïté tragique. Essai sur une forme du tragique au théâtre*, Jose Corti, « Les Essais », 2008 », *Revue d'histoire littéraire de la France*, n° 4, 2010, pp.1015-1016
- 根岸徹郎「[[書評] 小田中章浩『現代演劇の地層 フランス不条理演劇生成の基盤を探る』」『日仏演劇協会会報』復刊第2号、2010年、p.13
- 「ジュネ演劇のこれから」『ふらんす』2010年12月号、pp.44-45
- 野田はるか「海外でふれたマイムの世界」『都市文化研究』第17号、2011年、pp.117-118
- 野中広樹「手品の種に仕込まれた思い出——『ガラスの動物園』(ダニエル・ジャンヌトー演出、テネシー・ウィリアムズ作)」、SPACウェブサイト内、2011年
- 芳賀徹「書評『日本におけるポール・クローデル—クローデルの滞日年譜』」『ふらんす』2011年8月号、p.75
- 畑澤聖悟「普遍性があるということ——カミュ『ペスト』」『悲劇喜劇』2011年8月号、pp.12-13
- 林正和「パリ・秋のフェスティバル 2010——多彩な演劇の力を提示」『テアトロ』2011年3月号、pp.66-70
- 日比野雅彦「書評 矢橋透著『演劇の精神史 バロックからヌーヴェルバークまで』」『中部支部研究報告集』第33号、仏文学会、2009年、pp.69-71
- 藤井慎太郎「国際シンポジウム報告『演劇・舞踊・芸術環境 日仏交流の20世紀』」『演劇映像学 2009』報告集1、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム、2010年、pp.1-20
- , « *Chronologie des relations France/Japon den les arts de la scène* », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010, pp.116-119
- 「海外 STUDY フランスの舞踊環境の変遷 アンジェ国立現代舞踊センターを中心に」『地域創造』第30号、2011年、pp.63-68
- 「フランス語圏の演劇論」、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点、演劇研究基盤整備、2011年、pp.i-iv ★
- 堀切克洋「地理的な外部／歴史的な外部——フェスティヴァルの功罪を中心に」『シアターアーツ』、2010年秋号、pp.25-34

——「重層化するテキスト、声、記憶——クリストフ・ルタ
イユール演出『ヒロシマ・モナムール』、SPAC ウェブサイ
ト内、2011年

——、北原まり子「フランス語圏舞台芸術・文献目録
(2007-2009)」『日仏演劇協会会報』復刊第2号、2010年、
pp.15-27

眞下弘子「書評『フランス17世紀演劇事典』」『ふらんす』
2011年7月号、p.75

間瀬幸江「書評・紹介 小田中章浩著『現代演劇の地層——
フランス不条理劇生成の基盤を探る』」『演劇映像』第52号、
早稲田大学文学学術院、2011年、pp.60-64

——「『シャイヨの狂女』(ジャン・ジロドゥ作)初演時の演
出ノートより(1)」『演劇映像』第52号、早稲田大学大学
院文学研究科、2011年、pp.102-126

ジェレミー・マッカーター「伝記 世紀の大女優サラ・ベル
ナール」『ニューズウィーク』2010年10月6日号、阪急コ
ミュニケーションズ、pp.54-55

ジュラル・マノニ「新世紀のエトワールたち——『ジュエ
ルズ』」『ダンスマガジン』2010年1月号、林修訳、pp.42-44

——「偉大なエトワール オペラ座最後の夕べ」『ダンスマガ
ジン』2010年2月号、林修訳、p.49

——「待ちに待った任命——『くるみ割り人形』」『ダンスマ
ガジン』2010年3月号、林修訳、pp.20-21

——「現代を生きるベジャール——パリ・オペラ座・ベジャ
ール・バレエ」『ダンスマガジン』2010年4月号、林修訳、
pp.62-63

——「オペラ座が誇るマルグリットたち——『椿姫』」『ダン
スマガジン』2010年5月号、林修訳、p.36

——「ル・リッシュ、輝く魂——『シッダールタ』」『ダンス
マガジン』2010年7月号、林修訳、pp.54-56

——「プラテルによる伝統の継承——パリ・オペラ座バレエ
学校公演」『ダンスマガジン』2010年7月号、林修訳、
pp.80-81

——「ラコット振付『三銃士』世界初演に向けて」『ダンス
マガジン』2010年8月号、林修訳、pp.50-51

——「新世紀ロビズ!——『ジェームズ・ロビズへのオ
マージュ』」『ダンスマガジン』2010年8月号、林修訳、
pp.52-55

——「新旧、競い合う火花——『ラ・バヤデル』」『輝夜姫』
『ダンスマガジン』2010年9月号、林修訳、pp.54-58

——「愛と死の色彩——『ローラン・プティ・プロ』」『ダン
スマガジン』2010年12月号、林修訳、pp.26-30

——「まるで妖精のような……——シャンゼリゼ劇場『二十一

世紀のエトワールたち』」『ダンスマガジン』2010年12月号、
林修訳、pp.34-36

——「時間を忘れるほど輝きにあふれて——『パキータ』」
『ダンスマガジン』2011年1月号、林修訳、pp.58-59

——「個性光るジークフリートたち——『白鳥の湖』」『ダン
スマガジン』2011年3月号、林修訳、pp.32-35

——「ル・リッシュのイメージが結実した夜——『カリギュ
ラ』」『ダンスマガジン』2011年5月号、林修訳、pp.36-37

——「二度、送られた喝采——『コッペリア』」『ダンスマガ
ジン』2011年6月号、林修訳、pp.36-37

——「並外れたジュリエットたち——『ロミオとジュリエッ
ト』」『ダンスマガジン』2011年7月号、林修訳、pp.22-24

——「純粹美が生む至福の70分間——『レイン』」『ダンス
マガジン』2011年8月号、林修訳、pp.42-43

——「やさしい攻撃——マクレガー『感覚の解剖学』」『ダン
スマガジン』2011年9月号、林修訳、pp.42-43

——「エトワールの旅立ち——マルティネズ退団公演」『ダ
ンスマガジン』2011年10月号、林修訳、pp.28-31

——「オペラ座注目の2公演」『ダンスマガジン』2012年2
月号、林修訳、p.58

三浦展「ジュネを通して考える『演劇』」『ユリイカ』2011
年1月号、pp.138-143

三浦雅士「プティの光芒——追悼ローラン・プティ」『ダン
スマガジン』2011年9月号、p.67

——「成熟の時、時の成熟——シルヴィ・ギエム・オン・ス
テージ」『ダンスマガジン』2012年1月号、pp.12-17

——、森英恵「舞台衣裳を創造する喜び」『ダンスマガジン』
2010年2月号、pp.54-58

——、ニコラ・ル・リッシュ「バレエ創造者たちの楽器とし
て」『ダンスマガジン』2011年1月号、pp.60-66

——、エリザベット・ロス「ベジャールと過ごした時間」
『ダンスマガジン』2011年2月号、pp.70-74

——、マニュエル・ルグリ「ヨーロッパ中央に位置して——
新人芸術監督の眼から見た世界のバレエの現在」『ダンスマ
ガジン』2011年10月号、pp.22-26

三上その子「骨と関節からなる回廊の中に——日仏国際共同
制作公演『遊*ASOBU』」『詩学』第62(3)号、詩学社、2007
年、pp.19-23

皆川勤「書評 ジェラル・ド・ネルヴァル著 ジョゼフ・
メリー著 藤田衆訳『ハールレムの版画師』」『図書新聞』
2009年5月2日号

みなもとごろう「劇評 クローデルとベケットの今——青年
団国際演劇交流プロジェクト 2011 = 交換、新国立劇場 = ゴ

ドーを待ちながら、円 = カシオペアの丘で」『テアトロ』
2011 年 6 月号、pp.50-52

岑村傑「ジャン・ジュネ主要作品解題」『ユリイカ』2011 年
1 月号、pp.210-223

森新太郎、藤田赤目「混沌としたものを選んで 森新太郎：
新国立劇場で『ゴドーを待ちながら』を演出」『Join』第 73
号、日本劇団協議会常務理事会、2011 年、pp.3-15

八木雅子「[紹介] バレエ・リュス展」『日仏演劇協会会報』
復刊第 2 号、2010 年、p.14

柳瀬太一「ささやきの詩想レジスタンス～桜前線 2000 キロ
の旅」『テアトロ』2011 年 5 月号、pp.32-33

横山義志「静岡のオリヴィエ・ピィ」『日仏演劇協会会報』
復刊第 2 号、2010 年、pp.8-9

吉田裕「二人が刻印した時の重み——マニユエル・ルグリと
シルヴィ・ギエム」『ダンスマガジン』2010 年 5 月号、
pp.14-15

——「神々の物語へ」『ダンスマガジン』2010 年 11 月号、
pp.14-15

渡辺淳「『モリエール——恋こそ喜劇』 喜劇作家モリエール
誕生の秘密」『テアトロ』2010 年 3 月号、pp.66-68

渡辺敦彦「“沈黙の強度”の魅惑—ローザス『ツァイトウン
グ』—」『ダンスマガジン』2010 年 3 月号、pp.75-76

——「ダンスをめぐるふたつのハイブリッド——ギエム『エ
オンナガタ』／プレレジョカージュ『千年の平穏が続く』」
『ダンスマガジン』2011 年 4 月号、pp.70-72

渡辺えり「オンディーヌと唐十郎と井上ひさし」『悲劇喜劇』
2010 年 8 月号、pp.6-7

渡辺保「『芸』を支える身体——『霧の会』パリ公演」『ダ
ンスマガジン』2011 年 9 月号、p.75

渡邊守章「メータ、イスラエル・フィル、そしてベジャール・
バレエ」『ダンスマガジン』2010 年 11 月号、pp.70-71

——「ジュネに私が負う幾つかのこと」『ユリイカ』2011 年
1 月号、pp.126-129

——、清水徹、松浦寿輝「鼎談 多面体マラルメの耀きを求
めて」『ちくま』2010 年 7 月号、pp.6-13

アニェス・ピエロン「グラン＝ギニョル ベル・エポックの
恐怖演劇」『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第 17 号、
真野倫平訳、南山大学ヨーロッパ研究センター、2011 年、
pp.13-19

アンヌ・ユベルスフェルト「コルテス——その才能の諸地平
(後)」、佐藤康訳、『日仏演劇協会会報』復刊第 2 号、2010
年、pp.5-7

Cristian Biet, « Nous nous connaissons depuis 144 ans »,

Théâtre/Public, n° 198, 2010, pp.21-22

Antoine Laubin, « Imagerie par résonances à propos d'IVANOV
RE/MIX d'après IVANOV de Tchekhov », *Alternatives théâtrales*,
n° 108, 2011, pp.65-67

Jean-Louis Perrier, « Le chant du sein dans *HOUSE OF THE
SLEEPING BEAUTIES* », *Alternatives théâtrales*, n° 104, 2010,
pp.58-60

Cristophe Triau, « Entretien avec Georges Banu — Une passion
défunte : le Japon et ses acteurs », *Théâtre/Public*, n° 198, 2010,
pp.17-20

※ 末尾に星印 (★) が付された文献は、下記のウェブサイ
トにて閲覧することができる。早稲田大学演劇映像学連携研
究拠点「演劇研究基盤整備：舞台芸術の翻訳と公開」
URL = <http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/trans/>

前号につづいて、文献目録をお届けいたします。原則として
2010～2011 年内に刊行された文献を対象としております
が、復刊第 2 号収録分 (2007～2009 年) から洩れてしまっ
た文献も同時収録しております。会員間の知的交流の一助と
なれば幸いです。(H)